様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ６ 月 １４ 日現在

機関番号：３２６０６
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2015～2017
課題番号：１５Ｋ０２９４８

研究課題名（和文）社会的結合と消費文化 － 交換・贈与・社交のネットワークと公共圏を再考する

研究課題名（英文）Sociability and Consumer Culture: Rethinking the Public Sphere and the Networks of Exchange, Gift and Social Contracts

研究代表者
眞嶋　史叙（Majima, Shinobu）

学習院大学・経済学部・教授

研究者番号：９０４５３４９８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,700,000円

研究成果の概要（和文）：本研究プロジェクトでは「消費文化史研究会」の活動を主軸として、消費文化の歴史的形成と、消費文化と多様な社会経済的要素との結びつきを検討した。プロジェクト構成員は単独および共同プロジェクトを通じて研究を行い、その成果は構成員による研究発表、「シリーズ消費文化史」として出版される研究書の執筆という形で具体化された。本研究プロジェクトの主要成果の一つは、平成28年度に開催された国際会議History of Consumer Culture: Objects, Desire and Sociabilityである。同学会の基調講演と主要な発表は平成30年3月に学会プロシーディングスとして出版された。

研究成果の概要（英文）：This research project, conducted through the History of Consumer Culture Research Group, has examined the historical formation of consumer cultures, broadly defined, and the links between consumer cultures and various socio-economic factors. The project members explored the research theme by carrying out individual and collaborative research projects while disseminating the research outcomes in their publications and in writing monographs that will publish as the History of Consumer Culture monograph series. A major achievement of the project was an international conference that the project held in 2017, entitled ‘History of Consumer Culture: Objects, Desire and Sociability’. The conference brought together more than 50 domestic and international scholars to discuss the project’s theme from international and interdisciplinary perspectives. The conference’s three keynote lectures and selected research papers were featured in the conference proceedings published in March 2018.

研究分野：消費文化史、イギリス社会経済史

キーワード：消費文化　西洋史　国際研究者交流

１．研究開始当初の背景

近年、ミクロレベルでの消費を検証する個別の歴史研究が進み、文学の歴史的背景・文脈を重視した「ニュー・ヒストリシズム」も広く取り入れられるようになった。歴史分析の概念も、フランス史の二宮宏之氏によって提唱された「ソシアビリテの社会史」やドイツ社会学のハーバマスの「公共圏」概念を援用した市民社会の読み直しなど、近代史の再検討を促す重要な視点が現れてきた。18 世紀イギリス啓蒙思想家が語った「ソーシャビリティ」は、20 世紀に入りジンメルやエリアスによって分析概念と認知され、それを拡張した「公共圏」概念は広範囲にクラブや組合、酒場や劇場の研究にも批判的に応用されながら、「社会的結合」あるいは「新たな階級形成」の実証に結びついてきた。一方で、ソーシャビリティを範疇に含みうる Social Capital の研究もパットナム以降進んできており、また「社会関係的な資質」と並び Cultural Capital の概念を重視して、消費社会における階級の再形成過程を分析したブルデューの研究も一定の影響力を発揮してきた。本研究では、これら近年の歴史学の進展を、市場経済における消費行動を理解する切り口として取り込んだ上で、「社交」と「社会的結合」に関する国内の研究を統合する枠組みとしての「消費文化史」研究を深めることを意図し、歴史学・社会学・人類学・政治学の研究蓄積を糧にしつつ、「交換・贈与を含めた流通」と「消費」を中心に据えた年代横断的な共同研究を進めた。

２．研究の目的

本研究の目的は、(1) 従来からの「市場経済化」と「市民社会形成」の二分法的議論を解体し、生産、交換・贈与を含めた流通、そして消費が共に織りなす「消費文化」を結節点とした歴史を紐解く作業を通じて、(2) 消費主体がもつ「経済・文化・社会関係的な資質」、言い換えれば「資産・教養・社交性（ソーシャビリティ）」が重層的に醸成され複合的に発露する公共の場とその形成過程を再考し、(3) 公共圏を形づくりながら生成・再生成される社会的結合の中で、いかにネットワーク集積的に嗜好や心づかいが共有され、またいかに動的な共有過程が変化促進的な役割を果たすかを探求することであった。これら三つの研究関心を軸として、本研究では緻密な事例研究を下敷きとして理論と実証研究のバランスを取りつつ、プロジェクト構成員が個別の研究および定期的な研究会での議論を行ったうえ、具体的な研究発表を通じて国内外の研究者と連携しつつ、研究成果を広く共有することを狙った。

３．研究の方法

本研究は、平成 21～23 年度および平成 24～26 年度における科学研究費基盤（C）助成研究（前研究・前々研究）において整備を進めてきた「消費文化史」の学問的基盤の上に立脚し、プロジェクト構成員が調査・分析をテーマごとに分担し、理論面では各研究者の議論を有機的に組み合わせて共同作業を行った。

平成 27 年度は、プロジェクト構成員による個々の調査研究と定期的なディスカッションを通じて班ごとの研究テーマへの理解を深め、プロジェクトが開催する国際学会での発表にまとめる作業に取りかかると共に、「シリーズ消費文化史」発行に向けて単著の執筆を進めた。同時に、前研究期間中に開催した国際シンポジウム基調講演者 Frank Trentmann（ロンドン大バークベック校）とは、新（研究協力者・ロンドン大バークベック校）が共同プロジェクト「エネルギーの物質文化」を立ち上げ、消費史の観点からエネルギー史を見直す研究を行った。新は 2012 年の国際学会における基調講演者の一人 John Brewer（カルフォルニア工科大）の組織した国際学会に参加し、その後の出版プロジェクト Scarcity in the Modern World にも携わった。

平成 28 年度は、研究課題を主要テーマとした国際学会 ‘History of Consumer Culture: Objects, Desire and Sociability’ を開催した。この学会には国内外から 50 名以上の研究者が参加し、30 名以上の研究者が研究発表を行った。基調講演では本研究の分担者草光俊雄が公共圏の形成と消費文化を伝記記述との関連で報告したほか、Lawrence Klein（ケンブリッジ大）がソーシャビリティと密接に関連している 18 世紀の Politeness 概念と実践がいかに発展したかについて講演し、Maxine Berg（ウォーリック大）はインドにおけるクラフト産業がローカルとグローバルをつなぐネットワークの中で機能していることを論じた。基調講演だけでなく、9 つの研究発表セッションにおいても、本プロジェクトに関連するトピックについて活発な議論が行われ、学会として成功を収めた。同年度においては、上記 Trentmann の消費史をテーマとした単著『フリートレイド・ネイション』を田中（研究分担者・青山学院大）が翻訳し、新広記の解説を付して NTT 出版から出版した。同書の出版の出版に際しては、平成 28 年 11 月 24 日青山学院大学で著者講演会を行うなど、プロジェクト主催の国際学会とプロジェクト構成員の共同活動を発展させた形で、日本における消費史の認知度を上げる具体的な活動を行うことができた。

平成 29 年度は、前年度の国際学会を土台にプロジェクト構成員が個別に研究の深化をはかりつつ、国際学会を元にした論文集への執筆を行い、田中、大橋（研究分担者・立教大学）、眞嶋、新が編者として編集作業を行った結果、予定通り平成 30 年度 3 月に論文集の出版を実現した。「シリーズ消費文化史」は、担当編集者の移動と共に NTT 出版か

ら慶應大学出版会へと発行元を移し、既に眞嶋、新井、新の単著について出版企画としての採用を見た。プロジェクト最終年度として、定期的なミーティングを継続した上、平成29年9月には研究会全体で総括ミーティングを行ったほか、眞嶋の在外研究期間開始に伴い、Berg、Klein 各氏との共同研究をさらに発展させる作業を行った。新と Trentmann とのエネルギー消費の歴史に関する共同研究も、イギリスを中心に進められ、ケンブリッジ大学と英国映画協会でワークショップを開催するなどの活動を行った。国内ではプロジェクトの継続的活動に向けて、平成 30 年 2 月にプロジェクト構成員のミーティングを開き、新が「シリーズ消費文化史」の一冊となる単著の執筆状況について報告したほか、今後の活動について話し合いを行った。

４．研究成果

本研究の具体的な研究成果の概要は、平成30年 3 月に刊行された論文集 History of Consumer Culture: Objects, Desire and Sociability 所収のプロジェクト構成員の論文にまとめられている。上記のように慶應大学出版から「シリーズ消費文化史」の発行に向けプロジェクト構成員の執筆が進んでいるほか、イギリスの出版社 Routledge ともプロジェクトのこれまでの発表論文をまとめた論集の出版に向けた話し合いが進んでいる。以下に個々のプロジェクト構成員の研究成果につき、要点を列記する。

（1）眞嶋（研究代表者）が平成27年度以降行った活動は、主として消費文化史研究会および消費文化史国際会議の開催を通じて、17世紀から 20 世紀にかけてのイギリス服飾産業に関する研究発表を行うことであった。それに平行した形で、19 世紀から 20 世紀にかけてのイギリスと日本の交流の接点として、東南アジアにおける消費経済についても共同研究および現地調査を重ね、研究領域を広げてきた。具体的な研究成果としては、平成27 年刊行の消費文化史国際会議プロシーディングスにおいて、17 世紀前半のチャールズ１世時代における王室人物画の分析と繊維産業関連の貿易指標の分析を通じて、イギリスにおけるファッションの勃興を論じた。平成 30 年刊行の消費文化史国際会議プロシーディングスにおいては、18 世紀前半のアン女王治世下における日刊紙上の社会風刺の分析と、株式市場および大規模投資を必要とした経済活動の分析を通じて、ファッションにおけるマクロレベルおよびミクロレベルの技術革新が促される要因について考察した。歴史分析手法の再検討の一環として、18 世紀後半における産業革命の要因を考察した研究書を共訳者三名とともに翻訳し、産業革命研究の見取り図を示す訳者解説を執筆した。

（2）草光（研究分担者）は「ソーシャビリティと公共圏」班の研究を担当し、平成 27 年度には消費文化史研究会の会合に参加した他、川勝平太静岡県知事から依頼を受け６月１４日に静岡県の幹部職員に向けて、消費社会と植物について講演をした。これは平成27 年に刊行された消費文化史国際会議プロシーディングスにおいて論じた、大英帝国での植物収集と消費社会の形成との歴史的つながりというテーマを発展させた研究であり、「シリーズ消費文化史」のひとつとして出版予定の単著でも取り上げる予定である。平成 28 年 3 月には、学士院から招聘された Sir Keith Thomas(オックスフォード大オール・ソウルズ校）と研究の打ち合わせを行った。平成 28 年度には、9 月に Gervase Rosser（オックスフォード大セイントキャサリン校）と Jane Garnett（同大ウォッダム校）を招聘し、放送大学文京学習センター、学習院大学、津田塾大学、京都大学などで講演会を行った。平成 28 年 12 月にはみすず書房より『歴史の工房―イギリスで学んだこと』を出版した。平成 29 年 3 月 23 日から 25 日まで学習院大学で国際会議を開催し、初日に基調報告を行った。平成 29 年度は『ヴィクトリア朝文化研究』No. 17（平成 29 年 11 月） に「19 世紀の伝記について」を発表。春の国際会議の報告を短くまとめ、さらに新しい知見を加えたものであり、上記「シリーズ消費文化史」単著の執筆活動として位置づけられる。

（3）田中（研究分担者）は研究実施期間中、主に二つの線に沿って「階級と文学・文化・教養」という研究テーマの調査を進めた。一つは、英国ヴィクトリア時代における美術館・博物館を、教養・文化、国家政策、市場社会という三者の競合と均衡の場として把握し、その具体的な諸相につき、リサーチを行った。その成果の一部は、平成 29 年 3 月に学習院大学にて開催された第 3 回国際会議での発表は平成 30 年 3 月に刊行された学会プロシーディングスに掲載された。もう一つは、資本主義社会の中で消費の論理が強大さを増した時に、従来型の「文化」の担い手である文学者を含む芸術家が、イギリス、日本、アメリカなどの諸国においてどのような対抗する立場を築いたのかに関するケース・スタディである。このテーマに関しては、「ヴィクトリア時代批評における均衡の観念」として、日本英文学会第 87 回大会において口頭発表したほか、「戦後保守主義へのアフェクション−三島由紀夫と吉田健一」として「国際三島由紀夫シンポジウム 2015」にて報告し、井上隆史他編『混沌と抗戦−三島由紀夫と日本、そして世界』の一章として出版した。さらに同様なテーマを英語論文としても発表した。また、イギリスにおいて大きく発展している消費文化研究の成果を日本に紹介することにも注力し、平成 28 年 11 月には、上記 Trentmann の主著『フリートレイド・ネイション−イギリス自由貿易の興亡と消費文

化』を翻訳刊行した。

（4）新井（研究分担者）は田中と共に「階級と文学・文化・教養」のテーマを取り扱い、主に消費文化としての英国の「観光」のイメージの形成、そしてその背景となる歴史、社会、文化的要素について、文学作品および映像作品における表象とその受容を通して研究した。平成 27 年度 は、主に英国 19 世紀末のユーモア作家ジェローム・K・ジェロームの旅行記を分析し、それが 19 世紀末における、ロウワー・ミドル・クラスの教養志向と知識欲を反映していることを考察した。その結果は日本英文学会第 87 回大会において発表した。平成 28 年度においては英国ヴィクトリア朝における王室のイメージ、教育、出版、写真、美術、慣習の歴史的かつ文化的背景を考察し、それがいかにヴィクトリア朝の階級文化、そして文学、芸術生活に影響を及ぼしてきたかを単行本にまとめた。さらに、階級における上昇の手段としての教育に焦点を絞り、「紳士」のコンセプトを形成し、英国文化における「紳士像」に大きな影響を与えた「パブリック・スクール」の歴史的背景をたどり、文学および文化におけるその表象を分析し、単行本にまとめた。さらに、19 世紀後半の英国の消費文化において、その存在感と力を急速に増していった「ロウワー・ミドル・クラス」について、その実態、イメージの形成、そして表象を分析、考察した博士論文を完成させた。さらに平成 29 年度には主に表象文化、映像を通しての消費活動、教育活動に目を向け、文学作品の映像アダプテーションの教育的、文化的効用と影響、異文化間の理解とテクストの共有という視点から研究を進め、共著三点にその成果をまとめた。また、「観光」という視点からも、文学における「ロマン主義」の台頭とその人気と受容がアッパー・クラスおよびアッパー・ミドル・クラスの湖水地方観光にどのような影響をあたえ、その影響がどのように広がったかを旅行記、回想記および文学作品を通して考察し、論文にまとめた。また「カントリーハウス」観光にも目を向け、それが「個人の家」でありながら、「国の共有財産」としてみなされていく歴史的、文化的過程をたどり、「観光」、「ヘリテージ」、「階級」の関係を、文学作品における表象も考察の対象としながら、その実態とイメージを分析し、その成果を口頭で発表した。

（5）菅（研究分担者）は「贈与と嗜好形成」のテーマを担当し、経済外部の諸要素と消費史について検討を行った。平成 27 年度は、市場原理とは相容れない工芸の需要と供給の関係について、様々な事例を考察した。そのなかでウィリアム・モリスの工芸論の対局にあると思われる刑務所内での工芸作品の生産についての考察を進め、同年 11 月にブライトン大学にて招聘特別講演を行い、論文集に所収された。平成 28 年度は、国立台湾科技大学におけるデザイン史の国際会議にて、工芸とジェンダーと帝国主義を考える研究を発表した。また、1946 年にイギリスで開催された Britain Can Make It 展の 70 周年記念の国際会議では、工業製品の展示方法とその国際的影響力を考察した研究を発表した。平成 29 年度は引き続き工業製品の展示の日英比較を通史的に行い、口頭発表原稿をまとめた。またデザイン史の大家である Jonathan Woodham、Yuko Kikuchi の両氏を津田塾大学に招聘し、19 世紀から今日までのデザイン活動をグローバルな視点から考える講演会を開催した。また、大陸ヨーロッパからロンドンに移動したユダヤ系デザイナーのネットワークに着目し、とりわけファッションおよび広告における彼らの活躍を検証し、その結果をロンドンのユダヤ人博物館の展覧会カタログに寄稿した。工芸品と工業製品の移動の「ネットワーク」の生成と活用、およびその影響についての考察を深めてきた。

（6）大橋里見（研究分担者）は「ソーシャビリティと公共圏」班の研究を担当し、平成 27 年度、商業・消費社会が急速に発達した 18 世紀イギリスにおいて、人々は各種の商品にどのようにアクセス、入手（消費）し、所有するにいたったか、人々は商品をどのように認識していたか、これらの問題を、多様な商品が交換される拠点としての役割をになった「競売」に着目して検討した。特に、商品認識に関連する作業として、近世末イギリスの人々の所有財を奢侈品（ここではとくに美術・芸術品）と必需品とに分けつつ、18 世紀における人々の商品にたいする認識が、奢侈品と必需品という単純な 2 分類に当てはまったかどうかを解明するため、競売による販売品の種別のデータ化を進めた。同時に、競売という、商品の一般的売り買いとは異なる販売手法の、モノの交換時の媒体としての機能と役割を明らかにすることを目指し、近世末葉の競売には、本格的量産体制以前の市場経済環境において、なお潤沢ではない商品の種類と数を、需要拡大する市場に提供する役割と、販売の現場をして一種の社交場となす機能があったことなど、平成 28 年度の終了時までに、一定の結論を得た。研究作業の最終段階 2018 年 3 月には、イギリスで追加調査を行い、本科研における研究をまとめた。平成 27 年度には、大橋個人が代表研究者の科研課題での調査を参照系としつつ、消費における「奢侈的消費」にかんする予備的調査を行った。平成 28 年度には、前年の予備的調査をふまえて、夏季休業中にイギリスにおいて研究調査をおこなった。平成 29 年度には、先のおよそ二年間の研究調査等において、発達する消費経済環境において、競売という売買手法を用いる理由の一面を明らかにするにいたった。この結果を、平成 28 年 3 月

に開催した国際学会において、口頭報告し、平成 30 年 3 月刊行のプロシーディングス所収の報告論文を執筆した。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　８　件）
①大橋里見，“一七八八年の「不況」とロンドン・ジェネラル・ホールの設立―展望と利害をめぐるブリテン木綿産業の「攻防」―”，史苑，vol. 73.1，ページ未定 (2018)，査読有.
②眞嶋史叙／Imelda Tambayang，“The Salt Trail: A Collaborative Historical / Anthropological Research on Inland Trading Routes on Southeast Asian Islands”，Gakushuin Economics and Management Review，vol. 32，pp. 1-29 (2017)，査読無.
③草光俊雄，“19 世紀の伝記について”，ヴィクトリア朝文化研究，vol. 17，pp. 93–98 (2017)，査読有.
④新井潤美，“岩や山に比べれば–ジェイン・オースティンと「観光」”，比較文学研究，vol. 103，pp. 69-83 (2017)，査読有.
⑤新井潤美，“『日の名残り』と執事という語り手”，ユリイカ，vol. 41 (21)，pp. 158-68 (2017)，査読有.
⑥眞嶋史叙，“書評 Peter Gurney，Wanting and Having: Popular Politics and Liberal Consumerism in England, 1830¬-70”，ヴィクトリア朝文化研究，vol. 14，pp. 104–108 (2016)，査読無.
⑦眞嶋史叙，“The Japanese Military Administration Department of Research Reports on Singapore’s Wartime Economy”，Journal of Asian Cultures，vol. 18，pp. 15-66 (2016)，査読有.
⑧眞嶋史叙／Gregg Huff，“The Challenge of Finance in World War II Southeast Asia”，War in History，vol. 22 (2)，pp. 191-210 (2015)，査読有.

〔学会発表〕（計　１４　件）
①田中裕介，“文献学者オスカー・ワイルド”，日本ワイルド協会第 42 回大会，2017 年 12 月 2 日，慶應義塾大学三田キャンパス.
②新井潤美，“イギリスのカントリーハウス観光と文学”，名古屋大学英文学会第 56 大会，2017 年 4 月 15 日，名古屋大学.
③菅靖子，“Japanese Interior Design for Export: Industrial Arts Institute and the Post-war Trade Exhibitions”，Modern Living in Asia 1945-1990，2017 年 4 月 10 日，ブライトン大学.
④草光俊雄，“Consumption and Biography”，History of Consumer Culture: Objects, Desire and Sociability conference，2017 年 3 月 23 日，学習院大学.
⑤眞嶋史叙，“Macro and Micro Innovations in Eighteenth Century Fashion”，History of Consumer Culture: Objects, Desire and Sociability conference，2017 年 3 月 24 日，学習院大学.
⑥田中裕介，“Anthony Panizzi and the Politics of Museums in Victorian Britain”，History of Consumer Culture: Objects, Desire and Sociability conference，2017 年 3 月 23 日，学習院大学.
⑦大橋里見，“Public Sales and the Local Community: An Aspect of the Consuming Culture in England in the 18th Century”，History of Consumer Culture: Objects, Desire and Sociability conference，2017 年 3 月 24 日，学習院大学.
⑧新井潤美，“イギリス文学における使用人のイメージ”，京都女子大学文学部英文学 (招待講演)，2016 年 5 月 30 日，京都女子大学.
⑨田中裕介，“戦後保守主義へのアフェクション–三島由紀夫と吉田健一”，国際三島由紀夫シンポジウム 2015，2015 年 11 月 14 日，東京大学駒場キャンパス.
⑩菅靖子，“The Last Stand for Japanese Crafts? – Design History Behind Bars”，The International Design History conference (招待講演)，2015 年 11 月 12 日，ブライトン大学.
⑪新井潤美，“イギリスのカントリーハウスと文学”，第 31 回甲南大学英文学会定期総会研究発表会 (招待講演)，2015 年 6 月 10 日，甲南大学.
⑫草光俊雄，“植物学の帝国”，静岡県幹部向け講演会 (招待講演)，2015 年 6 月 15 日，静岡県庁.
⑬新井潤美，“Jerome K. Jerome と New Humorist”，日本英文学会第 87 回大会，2015 年 5 月 23 日，立正大学品川キャンパス.
⑭田中裕介，“ヴィクトリア時代批評における均衡の観念”，日本英文学会第 87 回大会，2015 年 5 月 23 日，立正大学品川キャンパス.

〔図書〕（計　１９　件）
①草光俊雄，“Consuming Plants: Botany and Consumer Society” in Asia and the History of the International Economy: Essays in Memory of Peter Mathias (Routledge Studies in the History of Economics)，Routledge，全 210 頁 (pp. 草光 49-58) (2017).
②菅靖子，“Corrections Fairs and Japanese Furniture Made in Prison”，in Fredie Floré and Cammie McAtee，eds，The Politics of Furniture, Identity, Diplomacy and Persuasion in Postwar Interior，Routledge，全 214 頁 (菅 pp. 119-132) (2017).
③眞嶋史叙／Gregg Huff (共編訳)，World War II Singapore: Japanese Military Administration Research Reports on Syonan，Singapore: National University of

Singapore Press, 全 520 頁 (2018).
④田中裕介／新広記／大橋里見／眞嶋史叙 (共編著), History of Consumer Culture: Objects, Desire and Sociability, Forum for History of Consumer Culture, 全 181 頁 (草光 pp. 7-14, 眞嶋 pp. 102-111, 田中 pp. 61-65, 大橋 pp. 80-85) (2018).
⑤眞嶋史叙／湯沢威／安元稔／中野忠 (共訳, 訳者解説), 世界史のなかの産業革命―資源・人的資本・グローバル経済― (原題: British Industrial Revolution in Global Perspectives, Robert Allen 著), 名古屋大学出版, 全 380 頁 (2017).
⑥新井潤美, 魅惑のヴィクトリア朝――アリスとホームズの英国文化, NHK 出版, 全 221 頁 (2016).
⑦新井潤美, パブリック・スクール：イギリス的紳士・淑女のつくられかた, 岩波書店, 全 215 頁 (2016).
⑧田中裕介 (翻訳), フリートレイド・ネイション：イギリス自由貿易の興亡と消費文化, (原題：Free Trade Nation: Commerce, Consumption, and Civil Society in Modern Britain, Frank Trentmann 著), NTT 出版, 全 489 頁 (2016).
⑨草光俊雄, 歴史の工房--英国で学んだこと, みすず書房, 全 281 頁 (2016).
⑩草光俊雄／滝浦真人 (共著), 日本語アカデミックライティング, 放送大学教育振興会, 全 245 頁 (草光 1・13・14 章) (2017).
⑪新井潤美, “ジェイン・オースティン作品の映像化”, ジェイン・オースティン研究の今-同時代のテクストも視野に入れて, 彩流社, 全 397 頁 (新井 pp. 267-80) (2017).
⑫新井潤美, “イギリスからハリウッドとボリウッドへ-ジェイン・オースティンの作品の翻案, 文学とアダプテーション-ヨーロッパの文化的変容, 春風社, 全 370 頁 (新井 pp. 92-111) (2017).
⑬新井潤美, “表象文化 (映画) を教える-「アダプテーション」というコンセプト”, 教室の英文学, 研究社, 全 334 頁 (新井 pp. 123-29) (2017).
⑭田中裕介, “The Dramatist as Historian: Oscar Wilde ’s Society Comedies and Victorian Anthropology”, in Barnaby Ralph, Angela Kikue Davenport and Yui Nakatsuma, eds, London and Literature, 1603-1901, Cambridge Scholars Publishing, 全 161 頁 (田中 pp. 127-42) (2017).
⑮菅靖子, “The Reimann School and Studios: a continental design hub in London”, in Designs On Britain – Great British Design by Great Jewish Designers, London: Jewish Museum London, 全 115 頁 (菅 pp.85-91) (2017).
⑯田中裕介, “戦後保守主義へのアフェクション-三島由紀夫と吉田健一”, 混沌と抗戦-三島由紀夫と日本, そして世界, 水声社, 全 462 頁 (田中 pp. 285-294) (2016).
⑰田中裕介 (共訳), 『スクリブナー思想史大事典』, 丸善出版, 全 10 巻 4000 頁 (田中 第 3 巻 pp. 954–962, 第 3 巻 pp. 968–972) (2015).
⑱新井潤美, “That Lady They Call Clare: The Evil Stepmother in Wives and Daughters”, in Mitsuharu Matsuoka, ed, Evil and Its Variations in the Works of Elizabeth Gaskell, 大阪教育図書, 全 538 頁 (新井 pp. 394–408) (2015).
⑲眞嶋史叙／Gregg Huff, “Paying for War, 1941-1945: How Japan Financed Southeast Asia’s Occupation”, in M. Boldorf and T. Okazaki, eds, Economies under Occupation: The Hegemony of Nazi Germany and Imperial Japan in World War II, Routledge, 全 335 頁 (眞嶋 pp. 55-70) (2015).

〔その他〕
ホームページ等
http://www-cc.gakushuin.ac.jp/~20070019/HCC2017Programme.html

６．研究組織

(1)研究代表者
眞嶋　史叙 (MAJIMA Shinobu)
学習院大学・経済学部・教授
研究者番号：90453498

(2)研究分担者
草光 俊雄 (KUSAMITSU Toshio)
放送大学・教養学部・名誉教授
研究者番号：90225136

新井 潤美 (ARAI Megumi)
上智大学・文学部・教授
研究者番号：70222726

大橋 里見 (OHASHI Satomi)
立教大学・グローバル・リベラルアーツ・プログラム運営センター・特任准教授
研究者番号：40535598

井田 靖子 (菅靖子) (SUGA Yasuko)
津田塾大学・学芸学部・准教授
研究者番号：20312910

田中 裕介 (TANAKA Yusuke)
青山学院大学・文学部・准教授
研究者番号：00635740

(4)研究協力者
新　広記 (SHIN Hiroki)
ロンドン大学バークベック校・スクール・オブ・アーツ・リサーチフェロー